

八方尾根はどうなった？

～スタート地点引き上げ問題にゆれたその後～

富樫 均・浜田 崇・尾関 雅章

八方尾根で起こった、男子滑降競技スタート地点引き上げ問題^注は、長野冬季五輪の自然保護問題の象徴にもなりました。当時不明であったことの事実を検証し、その後の八方尾根の出来事と残された課題をまとめました。

消雪の遅れによる植生への影響の問題

1998年1月～2000年5月にかけて調査した積雪量とその変化から、コース整備による消雪の遅れの影響を検討しました。その結果、「積雪の分布パターンは年による変動がほとんどなく」、「雪の積もり始めと消雪時期は年によって大きく変化する」ことが確かめられました。消雪時期は年により1ヶ月以上ずれますが、4月下旬以降に加速的に消雪が進行する傾向は同じでした。これまで、同地域のスキーリフト営業は5月の大型連休までに終了しています。そのため、コース整備によって残雪期間が自然状態から極端に引き延ばされる状況にはなく、植生に大きな影響を与える可能性は少ないと考えられます。

冬季利用による植生への損傷の問題

スキー等による植物への影響を知るため、毎年のシーズン終了直後に調査を行いました。その結果、1998年春には広範囲にわたり人為的な損傷が確認されました(図1)。これは、五輪競技による損傷ではなく、冬季の一般利用による損傷と考えられます。ただし99年以降には、ほとんど損傷が認められなくなりました。99年春以降は、スキー場整備担当者等の管理努力が損傷を抑える効果を発揮したと考えられます。

環境五輪がもたらしたもの

五輪開催直後に、様々な立場の人が集まり「八方尾根の自然の保護と利用に関する協議会」が設置され、議論が深められました。そして、スキー場の管理強化や、一部地域の文化財指定もなされました。また、地元の人々の意識が変わり、行政と民間やボランティアの協力で、植生復元への取り組みが進みました。これらは、スタート地点の問題が地域に与えた大きな影響です。この一連

注) スタート地点問題：八方尾根を会場とした男子滑降競技において、国際スキー連盟が、当初計画されていたスタート地点を1680mから1800mに引き上げるように要請した。これに対し、長野オリンピック冬季競技大会組織委員会は、国立公園内の自然保護等を理由に引き上げを拒否。大会を目前に控えた1997年9月に入り対立が深刻化し、国内外のスキー競技団体や自然保護団体・行政・住民・マスコミなどを巻き込む大問題に発展。大会開催が迫る約2ヶ月前に、1765m地点への引き上げが公式に発表される形で論争は終息した。

の取り組みと自然保護の進展は、環境五輪が地域にもたらしたひとつの成果といつてよいでしょう。

残された4つの課題

冬季だけでなく、年間を通じた当地域の自然保護上の課題として、以下の四つがあげられます。

① 国立公園の境界問題

ここは国立公園第1種特別地域で、貴重な景観の核心地域にあたりますが、その外周に緩衝地帯や移行帯が設定されていません。しかも、曲がりくねる登山道が公園の境になっており、生態系の連続性を考慮した境界になっていません。将来的には、公園境界を自然の連続性を反映したものとし、矛盾の解消をはかっていくことが必要です。

② 冬季利用の適正管理

現在の利用状況においては、今後も観光事業者を中心に、コース整備等にあたって賢明な判断と管理の徹底をしていただくことが必要です。

③ 植生復元活動の継続

登山道沿いには土壌の流亡等による荒廃箇所が認められます。これまでに植生復元活動がされていますが、復元はなかなかうまく進んでいません。今後も応用的な調査研究を重ねるとともに、復元活動の継続が必要です。

④ ビジターセンターの設置

ここは、たぐい希な自然と景観に恵まれた場所であり、年間数十万人の観光客が集中する地域です。適切な保護と利用を可能にするため、ビジターセンター機能を有する施設の整備と人材の育成に向けた取り組みが望まれます。

上記の課題への対応には、科学的な裏付けデータとともに、多くの人たちの理解と協力が必要であり、解決には時間がかかるかもしれません。しかし、「自然との共存」を世界にアピールし、環境五輪を目指した地域に関わる一員として、今後もこれらの課題に取り組んでゆく責任を感じています。



図1 1998年4月に確認された損傷



図2 女子スタート地点